

重症心身障がい者とその家族に対する 映像・音楽を用いたリラクゼーション効果

山崎拓朗[†] 宮越祥恵 小林明夏 池田 桂 今野 篤

IRYO Vol. 76 No. 2 (125-128) 2022

要旨

重症心身障がい児者（以下、重心患者）の多くは、周囲からの働きかけに対する表情や反応の表出が乏しい。障がい児者への関わり方として提唱されてきたスヌーズレンには人間の五感を優しく刺激する多重感覚刺激が用いられ、リラクゼーション効果があるとされている。そこで私たちの病棟（新潟病院4階病棟）に長期入院中の重心患者に映像や音楽を用いた多重感覚刺激を行い、実際のリラクゼーション効果を検証した。方法はプロジェクターを使用し、重心患者に家族付き添いのうえで多重感覚刺激を行い、脈拍数、呼吸数、SpO₂、表情、四肢の動きを観察し客観的に評価した。結果、脈拍が実施中に減少した人が42%、5-15%増加した人が26%であった。実施中笑顔になった人は32%で、そのうち50%は脈拍が減少、40%は脈拍が5-15%増加していた。実施中笑顔になった人で脈拍が30%以上増加した人はいなかった。家族アンケートでは「良い」以上の高評価が87%に得られていた。本研究により、重心患者とその家族への多重感覚刺激のリラクゼーション効果を客観的に明らかにできた。

キーワード 多重感覚刺激, スヌーズレン, 脈拍数, 笑顔

はじめに

私たちの病棟（新潟病院4階病棟）の重症心身障害児者（以下、重心患者）は知的障害・運動障害（大島分類5-1程度）があり、臥床状態の方が多く、周囲からのさまざまな働きかけに対する表情や反応の表出が乏しい。そのためもあり、療育活動に対して看護スタッフの積極的な取り組みが少ない状態である。今回、看護師が療育活動に参加することで普段とは違う反応やバイタルサインの変化を観察することができないか、それを活かしてよりよい看護の提供につながらないかと考えた。

障がい児者への新しい関わり方の理念として、スヌーズレンは1970年代にオランダで開始された。姉崎は、「スヌーズレンとは人間の五感を優しく刺激する視覚刺激や聴覚刺激、嗅覚刺激等を用いた多重感覚刺激環境（Multi-Sensory Environment）を創出して、リラクゼーションや興味を促し、障害のある人とともに充実した時間を過ごすという関わり方の理念とその場の提供といえる」と述べた¹⁾。また、「スヌーズレンは重症児から重病患児、知的障害児、さらに認知症患者に至るまで、広くリラクゼーション効果があることが科学的に示唆された」とも述べた²⁾。この文献においては、重心患者2名を対象に

国立病院機構新潟病院 看護部 †看護師

著者連絡先：山崎拓朗 国立病院機構新潟病院 看護部 〒945-0847 新潟県柏崎市赤坂町3-52

e-mail: yamazaki.takuro.sd@mail.hosp.go.jp

(2021年7月20日受付、2022年2月25日受理)

The Effect of Relaxation Using a Range of Visual and Auditory Stimuli on the SMHPs (Severely Multiply Handicapped Children/People) and Their Family Members

Takuro Yamazaki, Sachie Miyakoshi, Sayaka Kobayashi, Kei Ikeda and Atsushi Konno, NHO Niigata National Hospital

(Received Jul. 20, 2021, Accepted Feb. 25, 2022)

Key Words: multiple sensory stimuli, snoezelen, pulse rate, smiling face